

[B年] 公現後第5日(2023年2月5日)

【旧約聖書日課】箴言 3章1~8節

- 1 わが子よ、わたしの教えを忘れるな。
わたしの戒めを心に納めよ。
- 2 そうすれば、命の年月、生涯の日々は増し
平和が与えられるであろう。
- 3 慈しみとまことがあなたを離れないようにせよ。
それらを首に結び
心の中の板に書き記すがよい。
- 4 そうすれば、神と人の目に
好意を得、成功するであろう。
- 5 心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず
- 6 常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば
主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる。
- 7 自分自身を知恵ある者と見るな。
主を畏れ、悪を避けよ。
- 8 そうすれば、あなたの筋肉は柔軟になり
あなたの骨は潤されるであろう。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙一 4章8~16節

8あなたがたは既に満足し、既に大金持ちになつており、わたしたちを抜きにして、勝手に王様になっています。いや実際、王様になってくれたらと思います。そうしたら、わたしたちも、あなたがたと一緒に王様になれたはずですから。9考えてみると、神はわたしたち使徒を、まるで死刑囚のように最後に引き出される者となさいました。わたしたちは世界中に、天使にも人にも、見せ物となったからです。10わたしたちはキリストのために愚か者となっているが、あなたがたはキリストを信じて賢い者となっています。わたしたちは弱いが、あなたがたは強い。あなたがたは尊敬されているが、わたしたちは侮辱されています。11今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、12苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、13ののしられては優しい言葉を返しています。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています。14こん

なことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです。15キリストに導く養育係があなたがたに一人いたとしても、父親が大勢いるわけではない。福音を通し、キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけたのです。16そこで、あなたがたに勧めます。わたしに倣う者になりなさい。

【福音書日課】ルカによる福音書 8章4~15節

4大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。5「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。6ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。7ほかの種は茨の中に落ち、茨と一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。8また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

9弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。10イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、

『彼らが見ても見えず、
聞いても理解できない』

ようになるためである。」

11「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。12道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。13石地のもとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。14そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。15良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

箴言 3章1～8節

- ¹ 子よ、私の教えを忘れず
私の戒めを心に保て。
- ² あなたには長寿と命の歳月が与えられ
平和が増し加わる。
- ³ 慈しみとまことがあなたを捨てることはない。
それらを首に結び、心の板に記しておけ。
- ⁴ あなたは神と人の目に
好意と良い成果を得る。
- ⁵ 心を尽くして主に信頼し
自分の分別には頼るな。
- ⁶ どのような道を歩むときも主を知れ。
主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる。
- ⁷ 自分を知恵ある者などと思わず
主を恐れ、悪から離れよ。
- ⁸ それはあなたの体の癒しとなり
あなたの骨の潤さいとなる。

コリントの信徒への手紙一 4章8～16節

⁸あなたがたはすでに満腹し、すでに富んでいます。私たちを抜きにして、王になっています。いや実際、王になっていてくれたらよかったです。そうすれば、私たちも、あなたがたと共に王になれたでしょう。⁹私はこう思います。神は私たち使徒を、まるで死に定められた者〔別訳→死刑囚〕のように、最後に引き出される者〔別訳→最後に出場する者〕となさいました。私たちは世界中に、天使にも人々にも、見せ物となったからです。¹⁰私たちはキリストのゆえに愚か者となり、あなたがたはキリストにあって賢い者となりました。私たちは弱く、あなたがたは強くなりました。あなたがたは栄えある者となり、私たちは誉れなき者となりました。¹¹今の今まで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、打ち叩かれ、落ち着く先もなく、¹²苦勞して自分の手で働いています。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、¹³罵られては勧めの言葉をかけています。今に至るまで、私たちは世の屑、あらゆるものの滓とされています。¹⁴こ

のようなことを書くのは、あなたがたを取じ入らせるためではなく、愛する私の子どもとして諭すためなのです。¹⁵あなたがたに、キリストにある養育係が無数にいたとしても、父親が大勢いるわけではありません。キリスト・イエスにあって、福音を通して、あなたがたを生んだのは、私なのです。¹⁶そこで、あなたがたに勧めます。私に倣う者となりなさい。

ルカによる福音書 8章4～15節

⁴大勢の群衆が集まり、方々の町から人々が御もとに來たので、イエスはたとえを用いて語られた。
⁵「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。⁶ほかの種は岩の上に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。⁷ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、それを塞いでしまった。⁸また、ほかの種は良い土地に落ち、芽が出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

⁹弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。¹⁰イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘儀〔三神秘〕を知ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、『彼らが見ても見えず、聞いても悟らない』ためである。」

¹¹「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。¹²道端のものとは、御言葉を聞くが、後から悪魔が来て、御言葉を心から奪い去るので、信じて救われることのない人たちである。¹³岩の上に落ちたものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じてても、試練に遭うと落伍してしまう〔直訳→離れる〕人たちである。¹⁴茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に塞がれて、実を結ぶことのない人たちである。¹⁵良い地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・2月5日「公現後第5主日」の日課主題は「教えるキリスト」。日本基督教団の「新しい教会暦」に基づく主日聖書日課では、「公現後」の期節の終わり、「受難節」に入る前の最終三主日の日課設定が固定されている。今年は、「公現後」第5から第7主日までが三主日に相当する。

・旧約聖書日課は、「箴言」から「父の論し」と呼ばれる格言のまとまりの箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、使徒が自分自身の使命を提示して勧めを受け入れるよう促す箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「種まきのたとえ」の箇所。

旧約日課(箴言3章より)

・「箴言」は、ユダヤ正典「諸書」に区分される格言集で、「コヘレトの言葉」や「雅歌」と共にソロモン王に帰される体裁(箴言 1:1)を取っている文書で、いわゆる「知恵文学」に分類される。古代エジプトの宮廷文書「アメンエムオパトの教訓」との類似性が指摘されている。「アメンエムオパト」は古代エジプト第21王朝(前1069～945年頃)の王の名で、この王朝の時代は、ほぼサウル王、ダビデ王、ソロモン王の時代に相当する。「列王記」によると、ソロモン王はエジプトのファラオの娘を妻として迎えており、この時代、ダビデ王家とエジプト王家に密接な関係があったことが推認される。ソロモン王が「知恵者」の象徴として扱われるようになった背景には、このエジプト王家との交流の事実があったのかもしれない。なお、古代エジプト第21王朝の時代、エジプトは南部にアメン神官団による独立王権が成立していたが、同時に第21王朝の王家もアメン神官団と密接な姻戚関係を築いていたことが知られている。エジプトでは、強力なアメン神官団をはじめとする宗教勢力と対抗する立ち位置で王権が成立している場合が多く、それゆえにファラオの神格化(現人神)を主張して権威を喧伝している時代が少なくない。しかし、第21王朝時代は、神官勢力が王権を握るという意味での「神聖政治」が取られていたという点で特異な時代である。この時代に成立したとされるダビデ・ソロモンの王朝が、エルサレムに王立神殿を設けて宗教的権威を囲い込みながら王権を神格化せずに維持し続けたのは、メソポタミア系の王権に倣ったばかりでなく、この時代のエジプトの王権のあり方に倣ったという側面もあることが推察される。「箴言」の文書としての成立は、前6世紀後半のバビロン捕囚からの解放・帰還後の時代と考えられる。

・日課箇所には、「申命記」や「エレミヤ書」に特徴的な表現が見いだされる。3節「心の中の板に書き記す」(申 6:8、同 11:18、エレ 17:1、同 31:33 など)、5節「心を尽くして主に信頼し」(申 6:5)など。

・1節「教え」はヘブライ語「トラー」の訳。同「戒め」はヘブライ語「ミツヴァー」の訳。

使徒書日課(Ⅰコリント4章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」に含まれる書簡文書で、パウロ自ら創設に関わったコリントの教会共同体に宛てている。共同執筆者として名が挙げられる「ソステネ」の詳細は不明だが、「使徒言行録」はコリントにある複数の会堂のうちの一つで「会堂長」を務めていた人物として「ソステネ」の名を伝えている(使徒 18:17)。

・コリントの教会共同体は、パウロが独力で創設・形成したわけではなく、ローマの教会共同体所属でコリントに移住してきていたユダヤ人夫妻アキラとプリスキラをはじめとする、他地域の教会共同体にルーツを持つ人々の協力を得て立ち上がったと考えられる。パウロを指導者と仰ぐ者たちも少なくなかったと思われるが、ケファ(=ペトロ)やアレクサンドリア出身のアポロを指導者と公言する者も一群存在した。そのような状況の教会共同体に対して、当初、パウロは自分の指導者としての立ち位置を強く主張し、ペトロらと同等の「使徒」と呼ばれることを当然と考えていた節がある(Ⅰコリ 9章)。しかし、「十二弟子」に基づく「使徒」を特別な職務として位置づけてエルサレムで始まった「使徒たちの教会共同体」の伝統を継承する教会共同体(使徒 1章)では、パウロにしる他の者にしろ、「使徒たちの教会共同体」で「十二人」の一人に選ばれることなく「使徒」を自称することはあり得なかったであろう。パウロを「使徒」としても、「使徒」と同等の指導者としても認めない者たちが、コリントの教会共同体の中には、一定数存在したため、パウロおよびパウロ支持派との間で対立が生じたと考えられる。そのような対立に対して、パウロは、「手紙一」では、自己の主張の正当性を訴えている(4章、9章など)。しかし、この訴えは必ずしも聞き入れられず、その後、自身の「使徒」性や指導者的地位を強く打ち出さない方針に転換して和解を計るようになったことを示唆するのが、「手紙二」ということになる。

・8節の直訳は、「今やあなたがたは満たされた者であり、今やあなたがたは富んだ者、わたしたちとは無関係にあなたがたは統治している。だから、わたしは願う、あなたがたが統治しているようにと。わたしたちがあなたがたと共同統治することになるために」。パウロは、コリントの信徒が「王様のように不遜に振舞っており、それは卑しいことだ」と非難しているわけではない。彼らが教会共同体を適切に「統治」する者となるべきであると考え、そうなっていれば、自分の「統治」の考えを共有してくれるはずだと訴えている。本書簡でパウロがコリントの教会共同体に一貫して訴えているのは、共同体の「平和的な秩序」が保たれることで(14:33 など参照)、その「秩序」の基礎となる教会観を示そうと奮闘している。しかし、日課箇所では、教会観を展開すること以前に、この勧めをする(パラカレオー→パラクレシス=慰め・励ます)パウロ自身の立ち位置を明確にしようとしている。

福音書日課(ルカ8章より)

・日課箇所は、「種蒔きのたとえ」の教えと弟子たちに向けた解釈の箇所。共観福音書が共通に伝えており、教えと解釈がセットになった伝承として初代教会の主要教義に位置づけられていたと考えられる。

・福音書が伝える主イエスの教えの中には「たとえ」を用いたものが一定数含まれるが、主イエス自身の「たとえ」の解釈が記される例はほとんどない(この「種蒔きのたとえ」の他には、マタイ福音書が伝える「毒麦のたとえ」の例に限られる。「毒麦のたとえ」は、マタイ福音書が「種蒔きのたとえ」とセットで伝えている)。実際、日課箇所10節でも触れられているように、主イエスは人々に「たとえ」で語られることが多くあったと考えられるが、その解釈を語られることはほとんどなかったと推認される。そして、「たとえ」の解釈は、ただ弟子たちだけに「神の国の秘密」として教えられたとされている。このような弟子たち向けの解釈が、実際に主イエスによってどれほど語られたのかという点については、議論がある。解釈が福音書にほとんど記されていないということから、実際にはほとんど語られなかっただろうと推認する者もある。一方、弟子たちに解釈が語られていたので、最終的に主イエスの教えと実践、また十字架と復活についての神学的な理解を彼らが為し得たと考えることもできるかもしれない。他方で、「たとえ」の多くが「神の国」のたとえとして語られている点から、「神の国」という神的世界観を教えることができる方法が「たとえ」以外にはありえなかったという理解が福音書の背景にある、と推認する者もある。そうであれば、「たとえ」は、基本的に相手が誰であろうと正確に解釈をすることが困難な教えであり、「たとえ」そのものとして聞き、心に留めることが求められているということになる。すると、「種蒔きのたとえ」の解釈も、主イエス自身が弟子たちに語られたにしる、弟子たちの教会が為したことであるにしる、飽くまで「一つの解釈」に過ぎないということになる。実際、「種蒔きのたとえ」は、ここで解釈として語られるような理解だけでなく、多様な理解がされてきた。

・日課箇所で示される「種蒔きのたとえ」の解釈(11節以下)の焦点は、「種」にたとえられる「神の言葉」を聞いた者のあり方に向けられており、御言葉を聞いて実行することの重要性に置かれている。他方、10節で「たとえを用いて話す理由」が示されていることに沿うならば、このたとえの焦点は、「種を蒔く人」に当てられていると見ることもできる。その場合、「種」にたとえられる御言葉を語る者の努力にもかかわらず、それが実を結ぶかどうかは聞いた者の「土壌」次第であるという、「伝道」の現実を弟子たちに教えているということになるだろう。この二つの焦点は、共観福音書に共通して見出されることであるが、「ルカ福音書」は、「マタイ」や「マルコ」と比較したとき、特に「解釈」(11節以下)に手を加え「良い土地」への称賛を強調しており、前者の焦点に傾いていると見ることができる。

来週の誕生日(2月5日~11日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-358 番「小羊をばほめたたえよ！」(= I 164 番「こひつじをばほめたたうる」)は、19世紀英国の詩人ブリッジズの原作を国教会司祭スリングが修正、また全面改訂した結果生まれた諸版が混同再録されてきた讃美歌で、『讃美歌 21』は米国聖公会版からの翻訳。曲は、19世紀英国王室チャペルのオルガニスト・エルヴィーの作曲。
- ・21-412 番「昔、主イエスの」(= I 234)は、20世紀日本を代表する讃美歌学者で牧師の由木康が1931年版『讃美歌』編纂時に、社会的視点を持った讃美歌を補うために作詞。
- ・21-524 番「われらみ名により」は、20世紀初頭の英国で指導的な立場にあった讃美歌作家ディアマー作詞の聖餐讃美歌。曲は、20世紀前半に米国で活躍した音楽家フリーデルがこの詞のために作曲。

21-358「小羊をばほめたたえよ」

Crown Him with Many Crowns

1. Crown him with many crowns, / the Lamb upon his throne; / Hark! how the heavenly anthem drowns / all music but its own; / awake, my soul, and sing of him / who died for thee, / and hail him as thy matchless King / through all eternity.
2. Crown him the Son of God / before the worlds began, and ye, / who tread where he hath trod, / crown him the Son of man; / who every grief hath known / that wrings the human breast, / and takes and bears them for his own, / that all in him may rest.
3. Crown him the Lord of life, / who triumphed over the grave, / and rose victorious in the strife / for those he came to save; / his glories now we sing, / who died, and rose on high, / who died, eternal life to bring, / and lives that death may die.
4. Crown him of lords the Lord, / who over all doth reign, / who once on earth, the incarnate Word, / for ransomed sinners slain, / now lives in realms of light, / where saints with angels sing / their songs before him day and night, / their God, Redeemer, King.
5. Crown him the Lord of heaven, / enthroned in worlds above; / crown him the King, to whom is given, / the wondrous name of Love. / Crown him with many crowns, / as thrones before him fall, / crown him, ye kings, with many crowns, / for he is King of all.

21-524「われらみ名により」

Draw Us in the Spirit's Tether

1. Draw us in the Spirit's tether, / For when humbly in Thy name, / Two or three are met together / Thou are in the midst of them; / Alleluia! Alleluia! / Touch we now Thy garment's hem.
2. As the brethren used to gather / In the name of Christ to sup, / Then with thanks to God the Father / Break the bread and bless the cup, / Alleluia! Alleluia! / So knit Thou our friendship up.
3. All our meals and all our living / Make as sacraments of Thee, / That by caring, helping, giving / We may true disciples be. / Alleluia! Alleluia! / We will serve Thee faithfully.